

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：37123

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592841

研究課題名（和文）産婦の膀胱ケアの再構築に関する研究

研究課題名（英文）Restructuration of Intrapartum and Postpartum Bladder Care

研究代表者

後藤 智子 (GOTO TOMOKO)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30441877

研究成果の概要（和文）：日本における産婦に対する膀胱ケアの実際と問題を明らかにする目的で、1. 出産後の女性を対象とした質的・量的調査、2. 助産師を対象とした質的・量的調査を実施した。また、産婦の膀胱ケアに関する基礎的資料を得る目的で、正常経過をたどる産婦・褥婦を対象とした膀胱用超音波診断装置を用いた観察研究を行った。さらに、それらの結果を統合し、正常経過をたどる産婦の膀胱ケアの再構築を試みた。

研究成果の概要（英文）：With the purpose of clarifying the practice and related problems of intrapartum and postpartum bladder care in Japan, quantitative and qualitative data collection was conducted among 1. Postpartum women and 2. Midwives. In addition, a prospective observational study was conducted among normal intrapartum and postpartum women using a bladder ultrasound machine. Based on the results, we suggest the restructuring of bladder care during the normal intrapartum and postpartum periods.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、生涯発達看護学

キーワード：分娩期 産褥期 排尿ケア 排尿症状 導尿 膀胱内尿量

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 健やか親子21では妊娠出産に関するQOL向上を目指すことが時代の要請であるとされ、日常の分娩に関わる処置適用のあり方について、リスクに応じた適用の検討やEBMによる見直しが求められていた。

(2) 妊産婦は妊娠出産に伴って頻尿、尿意

切迫、尿失禁などの排尿に関するマイナートラブルを経験することが多い。これらのトラブルの大半は自然軽快すると言われているが、障害として持続する場合もあり、女性のQOLに影響を与える健康問題となる。

(3) 妊産婦の排尿障害は多くの要因により複雑な影響を受けており、関連因子につい

て詳細な検討の必要性が指摘されている。しかし日本では妊産婦の膀胱ケアに関する文献は少なく、分娩期の膀胱ケアの見直しの必要性が説かれていた。さらに看護基礎教育で用いられるテキストや参考書には膀胱ケアに関する記述量や内容にバラツキがあった。

(4) WHO の正常出産のケアガイド指針の中でも、しばしば不適切に実施されている処置として導尿が指摘されており、先行報告においても、42%の女性が分娩時に導尿を受けており、導尿を受けた人は受けていない人に比べて分娩時の満足感が低く、導尿の説明に納得できていない人が 34%存在したとされていた。病産院のホームページや自然分娩のクリティカルパスにおいても「全例に導尿」という記載も見受けられ、分娩期の導尿が通常の膀胱ケアの一環として実施されている可能性が予想された。

(5) 欧米での膀胱ケアに関する研究報告は 1980 年代からみられ、2000 年代に入ってさらに増加した。その中には分娩進行における導尿の効果について疑問視する結果も示されている。しかし欧米の研究成果を分娩形態や医療システム、社会環境を異にする日本においてそのまま適用することには無理があり、日本独自の研究が必要だと考えられた。

## 2. 研究の目的

(1) 産婦・褥婦に対する膀胱ケア（排尿ケア）の実際と問題について、褥婦、助産師を対象に質的・量的調査を用いて明らかにする。

(2) 産婦・褥婦に対する膀胱ケアの基礎的資料を得るために、分娩・産褥期の膀胱内尿量と産婦・褥婦の自覚との関連について、膀胱用超音波画像診断装置（以下、BVI6100）を用いて明らかにする。

(3) 以上を統合し、正常経過をたどる産婦に対する膀胱ケアの再構築を行う。

## 3. 研究の方法

(1) 研究 1：助産師が分娩・産褥期に行う排尿ケアの実際や考え方について明らかにし、分娩・産褥期の排尿ケアを再考することを目的として、2010 年 1 月～2 月に、インタビューガイドを用いた半構成的面接を行った。2 病院、2 助産所に勤務する産科経験 5 年目以上の助産師に対して協力依頼書を配布し、協力の申し出のあった 12 名（病院 8 名、助産所 4 名）を対象とした。面接内容は、協力者の許可を得て録音し逐語録を作成した。分析の視点を「助産師の排尿ケアに関する観察視点」「助産師が分娩・産褥期の排尿ケアにおいて何を大切と考えているか」の 2 点とし、

逐語録から分析目的に対応する部分をデータとして抽出し、その意味内容の類似性に従ってカテゴリー化し質的に分析した。

(2) 研究 2：女性の分娩・産褥期における排尿の問題と排尿ケアへの要望を明らかにし、分娩・産褥期の排尿ケアを再考することを目的として、2009 年 11 月～2010 年 12 月、インタビューガイドを用いた半構成的面接を行った。研究 1 で協力を得た 2 病院、2 助産所のほか、1 育児サロンにおいて協力依頼書を配布し、協力の申し出のあった産後の女性 15 名（産褥 2 日～6 か月、初産 9、経産 6）を対象とした。面接内容は、協力者の同意を得て録音し逐語録を作成した。研究の問いとして、女性が分娩・産褥期に「どのような排尿の問題を経験しているか」「どのような排尿ケアを受けたと認識しているのか」「どのような排尿ケアを求めているのか」の 3 つを立て、対応する部分について意味のとれる単位でデータを抽出し、類似性・相違性を検討しながらカテゴリー化し質的に分析した。

(3) 研究 3：日本での助産師による分娩・産褥期の排尿ケアの現状と課題について明らかにすることを目的として、助産師を対象とした郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。研究 1 で助産師より得られた質的調査結果をもとに量的調査の枠組みを検討した上で質問紙を作成した。研究 1 で協力を得た施設の助産師から質問紙に対する評価を受け質問紙の洗練に努めた。本調査は 2010 年 11 月～12 月に実施し、分娩を取り扱う全国の A 系病院 57 施設の中で協力許可の得られた 30 施設の助産師 500 名および助産所（日本助産師会ホームページで公開）の管理助産師 213 名を対象に調査協力を依頼した。なお本調査では、研究 1 で協力を得た病院・助産所は対象施設から除外した。回収数は 305 名（回収率 42.78%）で、有効回答の得られた 294 名（病院 224 名、助産所 70 名）を分析対象とした（有効回答率 41.23%）。

(4) 研究 4：産前産後における排尿ケアのあり方についてケアの受け手である女性の視点に立って検討することを目的として、近隣地域の 4 か月健診を受診した女性を対象とした無記名自記式質問紙調査を実施した。研究 1 の褥婦に対する質的調査結果をもとにして質問紙を作成し、その作成過程において、現在子育て中である複数の女性（助産師）に評価を受けたほか、地域の保健師からの助言も反映させた。協力が得られた近隣の 5 市 4 町において 4 か月健診を受診する女性に対して質問紙を配布した。配布方法は健診案内に同封して郵送あるいは健診会場にて研究者が直接配布とし、回収は郵送あるいは健診会場

に持参してもらう方法をとった。質問紙の配布数 859、回収数 468 (54.48%)、分析対象数 458 (53.31%) だった。うち初産 216 名 (47.2%)、経産 242 名 (52.8%) だった。

(5) 研究 5: 分娩・産褥期の膀胱ケアの基礎的資料を得ることを目的として、単胎で正期産後の褥婦を対象に、BVI6100 を用いて測定した産褥早期の残尿量と膀胱および排尿症状との関連について検討した。ローリスク妊産婦を対象にしている産科診療所の協力を得て、2011 年 10 月～2012 年 4 月に実施した。事前に協力施設の排尿に関する治療・看護手順を確認し、観察協力者である助産師には BVI6100 の使用トレーニングを実施してもらった。協力者募集にあたっては、研究協力者 (医師) より単胎で正常経過をたどっている妊娠 32～33 週の受診妊婦に対し募集用ちらしを配布してもらい、その後協力の申し出のあった妊婦に対して研究者がインフォームドコンセントを行い、同意書に署名の得られた人を対象とした。対象者は他院への搬送など脱落者 9 名を除く 70 名 (初産 33 名、経産 37 名) だった。研究協力者 (助産師) には、BVI6100 を用いた分娩後 2 時間、産褥 1 日目 (産後 24 時間経過後)～5 日目における残尿量測定とともに子宮収縮状態の観察および記録を依頼した。また対象者には、女性の膀胱機能と排尿症状との関連をみるため、期間中に計 5 回の質問紙への回答を依頼した。とくに入院期間中においては、尿意、膀胱充満感、排尿満足度、排尿時痛、残尿感、尿失禁などについて毎日記録をしてもらった。

#### 4. 研究成果

(1) 研究 1: 助産師を対象とした本調査では、分娩期および産褥期における助産師による排尿ケアの観察視点と助産師が行う排尿ケアに影響を与えている諸因子との関連を明らかにすることを分析の視点とした。助産師が持つ分娩・産褥早期の排尿ケアの観察視点には、排尿間隔時間や膀胱充満などに関して曖昧さを示す項目が存在すること、排尿ケアには施設によって異なる影響因子が存在することが明らかとなり、今後さらに検討する必要性が示唆された。また、排尿ケアに対する助産師の考えから、助産師が分娩進行や分娩時出血との関連で排尿ケアを考えていることが再確認できたほか、医療介入による産婦の排尿行動への影響、慣例化したケアへの疑問も明らかにされ、今後さらに排尿ケアの現状やあり方について検討する必要性が示唆された。

(2) 研究 2: 産後の女性を対象とした本調査では、分娩進行に伴う排尿の問題のほか、初回排尿時、産褥期の排尿の問題が示された。

分娩後 2 時間で自然排尿を勧められた女性のなかには十分な排尿量を得られず不快感だけが残ったという人のほか、めまいや転倒などを経験した人も存在し、分娩後 2 時間での自然排尿の適用について慎重に検討する必要性が示唆された。今回、導尿に関する排尿の問題は挙げられなかったが、実施時の不十分な説明の指摘や不必要な導尿をしないで欲しいという要望が示され、産婦が自分で排尿できるようなケアのあり方を工夫する必要性も再確認された。また、分娩に伴う排尿トラブルの経験は、産褥早期よりも退院後の生活で強く認識されるということが女性の声を通じて明らかとなった。

(3) 研究 3: 本調査では、助産師による排尿ケアの観察視点の特性と傾向、自然排尿を尊重する助産師が行う排尿ケアに影響を与える因子として、分娩進行や子宮復古、出血など産婦・褥婦の状況因子、施設構造などの環境因子の存在が明らかになった。また、分娩後 2 時間での自然排尿の促しが慣例化されている現状も明らかにされた。以上より、助産師による排尿ケアにはさまざまな要因が関連しあいながら影響を与えていること、それら各要因の関連性を明らかにする必要性が改めて示唆された。また、病院勤務の助産師ほど排尿ケアの現状に葛藤を感じていた。

(4) 研究 4: 本調査では、4 か月健診時において 25%前後の女性が尿失禁や頻尿で悩んでいることが明らかにされた。また、妊娠前から膀胱炎や尿失禁などの排尿症状を訴える女性が約 27%みられ、妊娠前からリスクを抱えている人の存在が明らかにされた。さらに排尿症状に伴う生活への影響は 1 か月健診を境に外出が増えることから自覚されやすい傾向がみられた。女性が医療者より受けたと認識している排尿ケアについては 80%近い女性が満足を示していたが、妊娠・出産に伴う排尿問題について必要な情報を得る機会が十分でなかったと回答した女性が約 70%存在し、改めて予防への取り組みの重要性が確認された。

(5) 研究 5: 本調査での分析視点は、産褥早期における残尿量や自覚症状の経日的変化のほか、産褥早期と 1 か月健診における残尿量と膀胱・排尿症状の発生状況と関連性、産科学的因子と産後の残尿量と膀胱・排尿症状との関連性等である。本調査では、産褥早期の残尿量に関係なく子宮収縮状態は良好であった。また、初回排尿時に導尿を受けた褥婦 9 名のうち 5 名が起立性低血圧を起こしていることより、改めて分娩後の初回排尿時のケアについて検討する重要性が示唆された。詳細な分析は進行中である。

研究 1～4 より明らかにされた産婦および褥婦に対する排尿ケアの課題と、研究 5 より得られる分娩・産褥早期の導尿を含めた排尿ケアの根拠を統合することにより、分娩・産褥期の排尿における標準的なケアの指針を提供できると思われる。そのことが分娩による排尿障害の予防、不必要な導尿に伴う身体的、精神的苦痛の減少に発展すれば妊娠出産に関する女性の QOL 向上にも貢献できる。また、この成果は、看護基礎教育や新人看護職の教育に寄与できるものと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 佐藤珠美、後藤智子、看護基礎教育における分娩期の排尿ケアに関する文献検討-母性看護学と助産学の教科書の内容分析-、母性衛生、査読有、第 53 巻 2 号、2012 (掲載予定)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 後藤智子、助産師が分娩・産褥期のケアにおいて大切にしていること、第 25 回日本助産学会学術集会、2011、名古屋
- ② 後藤智子、助産師の分娩期および産褥早期における排尿ケアの観察視点、第 30 回日本看護科学学会学術集会、2010、北海道
- ③ 佐藤珠美、女性が分娩・産褥期に経験した排尿の問題と排尿ケアへの展望、第 51 回日本母性衛生学会学術集会、2010、石川

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

後藤 智子 (GOTO TOMOKO)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・助教

研究者番号：30441877

##### (2) 研究分担者

佐藤 珠美 (SATO TAMAMI)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50274600

石山 さゆり (ISHIYAMA SAYURI)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：80336122

濱田 維子 (HAMADA YUKIKO)

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・

講師

研究者番号：90369091

##### (3) 連携研究者

竹ノ上 ケイ子 (TAKENOUE KEIKO)

慶応義塾大学・看護学部・教授

研究者番号：30149710